

違う空の  
*HIEI x MUKURO* 同じ青

Happiness found around the stars.



shino  
&  
lovely-too-ticky

# Contents

## ～リレー短編小説～

1 巡り	ワールズエンド・ランドリー	3
2 巡り	可愛いヤツ	17
3 巡り	冬空からの贈り物	23
4 巡り	スターリットナイト	31

## ～お題交換～

たなごころ	43
紙吹雪	49

作品情報 & 著者コメント	56
---------------	----

◎この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。  
◎原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

1巡り  
ワールズエンド・ランドリー



歩道のない石畳の坂道を、ふたりはトコトコと歩いていく。

正午前の春の陽射し。愛らしい三等身の影をほのぼのと引き連れたふたりは、ガードレール沿いを一列になって、軽快にはないが、またゆっくりでもなく、一定のリズムでトコトコと坂道を上っていく。

先ほど彼は立ち止まって公園の方向へ指をさし、先を行く彼女の背中に話しかけた。けれど振り向いた彼女は、胸に抱えた紙包をより一層大切そうに抱きしめて、ぶるぶると激しく首を横に振った。

もう随分上ったはずだ。汗ばんだ額がそれを教える。坂道を駆け上がりあつという間にふたりを追い抜いた風に汗を拭われ。

ふと振り向けば。

柔らかいわりに眩しい光の中に、さっきまでいた坂の下の街並みと、その遥か向こうに都会のビル群が、灰色に近い水色の空の中に霞んで見えた。

\*

「ハンバーガー買いに行こうぜ」

そう言った時、軀はもう青と白のボーダーシャツとジーンズに着替えて、小さな黒いリュックを背負い、靴まで履いて玄関で待っていた。

この街は坂の街である。細い路地が複雑に入り組み、その路地をあちこちの階段が繋いでいる。道路は白い石畳に、階段も同じ石材の石段に舗装され、街灯は昔のガス灯のようなレトロなデザインにして至る所まるで西洋の路地裏のように演出しているのは若年層の誘致が目的らしいが、店という店は全て坂の下のお店街、最寄り駅までバスで三十分という立地は、働き盛りの忙しい若年夫婦には敬遠され、坂と階段だらけであるがゆえに年配層も寄り付かない、街づくりとしては大いに苦戦している土地だった。

けれど出勤とは無縁で時間に無頓着なふたりの目には、この街は静かで人の気配も少なく、それだけで抜群に景色の良い、何もかもが好条件の街に映った。

家に戻ると、軀はすぐさまリビングの窓を開け、庭のウッドデッキにテーブルをセットし始めた。

「結局、外で食うのか？」

公園を頑なに断つてまで帰ってきたのに、ダイニングではなく庭で食べたいらしい。軀はその違いを理解しかねる飛影に向かって、飛影の顔の前で得意げに、ちゅちゅと人差し指を立てて振った。

「全然違うぞ、飛影」

それからまたセッティング作業を再開した青と白のボーダーの背中が、重い椅子を持ち上げる勢いでこう言った。

ふたりきりで、食べたいだろ。

急勾配の坂にへばりつくように建てられた家。狭い土地坪にできるだけ多くの床面積を取るために、傾斜も利用して地下、一階、中二階、二階を立体パズルのように複雑に組み、階ごとに方向の違う階段で繋いだスキップフロアの家は、思った以上に軀を喜ばせた。

この家に来た初日、軀は子供のようにひたすら階段を上り下りし、吹き抜けから下階を覗き込み、柵から足を出してブラブラさせ、ほとんど野外アスレチックか何かと勘違いしているかのようなだった。

「家の中にこんなに階段があるなんて、面白い！隠し部屋みたいだ！」

「……」

二階のベッドルームから一階のダイニングテーブルに座る飛影に向かってぶんぶんと手を振る軀は、

頭上でとても無邪気に笑っていた。飛影はかつて一度だけ訪れた痴皇の館を思い浮かべて、ある意味コイツはお嬢様育ちなのかもしれないと思った。

椅子は二脚横並び。オーブンテラスのカフェのように気取ってみても。

ドリンクとポテト、ナゲットとソース、大量の紙ナプキン、すでに包装やホルダーの紙ごみに溢れたテーブルの上はジャンクなムードでいっぱいだ。

ふたりは並んで、それぞれ手にしたハンバーガーの包装をめくり、同時にバクつかぶりつく。

軀の表情は一見変わらないようだが、空気、とも言えるようなものだろうか、軀が嬉しそうにしていることは飛影にはわかる。

「美味いか」

「ん」

軀が愛らしく口元をきゅっと拭いながら答える。その返事と同時に、飛影はさっと身を乗り出して勝手に軀のハンバーガーに食いついた。軀はふふっと笑う。怒ったりはしないのだ、いつものことから。

「…また同じやつか？」

「ああ。アボカドクリームチーズな」

食べる時に押し出されたクリームチーズが、飛影の口の端に付いている。軀は愛おし気にそれを指で拭って、べろりと舐めた。一瞬、照れくさそうに交し合った視線の後に、飛影も自分のバーガーを

軀に差し出した。

軀も身を寄せて、飛影に持ってもらったままバクリとバーガーを食む。こちらもその瞬間にパンズの端からソースがたっぷりと染み出した。

「変わった味だ…なんだっけ？」

「期間限定だ。名前は覚えてない。味濃いな」

「でもなんかクセになりそうな味だ」

ケイジャンチキンという名前は覚えられなかったようだ。だが同じものをどうしても食べたいという性分ではない飛影が、今後そのことで困ることはないだろう。

今度は軀の口の端についた赤いソースを、飛影が顔を寄せて、ぺろりと舌で舐めた。

軀が飛影に向かって悠然と微笑む。ほら、ふたりきりで良かっただろ？

飛影が軀に向かって挑戦的に視線を返す。公園だって、構わないぜ？

続きは本編でお楽しみください





2巡り  
可愛いヤツ

温もりを求めて伸ばした手は空振りに終わった。

意地になりモゾモゾとベッドの中で探し回るがいつこうに見つからない。どうやら既に抜け出しているようだ。

小さく舌打ちをして飛影はようやく掛布から抜け出して身体を起こした。少し肌寒い季節になってきたが上半身は何も身に纏っていない。

移動要塞百足の奥にある元国王の部屋。その部屋のベッドでまだ覚醒しきっていない様子の飛影はあたりを見回す。

「やっとききたか？」

飛影が軀を見つけたタイミングで向こうから声をかけられた。

すっかり身だしなみを整えた軀はニコニコと微笑みながら飛影がいるベッド脇までくるとちよこんと隣に腰掛けた。

「人間界か？」

「ああ、雪菜のところに行ってくる」

茶色のブーツをブラブラさせながら軀は答えた。デニムシャツワンピースに首元には薄いシヨールを巻いてシンプルな装いだがすっきりと着こなしている。どこから見ても人間界仕様だ。

「……最近雪菜のところに行き過ぎだ。この前も行ったばかりだろう」

「そうか？ 今日には料理を教えてもらうんだ。前向こうで食ったのが美味くてな。アドガボ…とかいうヤツだ。お前の分も持って帰ってきてやるよ」

名前を正しく覚えていない軀だった、飛影がそれを分かる訳もなく、少し不機嫌そうにそうかただけ小さく呟いた。

「なんだ？ お前も行きたいのか？」

「オレが行く理由などないだろ」

「……いい加減兄だと名乗ればいいのにな」

頑なに名乗り出ない飛影に軀は呆れつつ肩を竦めた。雪菜自身が既に兄だと知っていると云ったらどんな顔をするのやら。人間界について行く気はないというのに、なおも飛影は何か言いたそうに軀を見つめてくる。軀が小首を傾げると観念したように飛影は口を開いた。

「最近周りのヤツらが嫌い……」

「煩いって人間界に行くことか？」

人間界の往来なら飛影の方がよっぽど行っている。納得いかない様子の軀に飛影は少し考えてから口を開いた。

「お前が雪菜を寵愛してると……」

「ぶっ!？」

突然の飛影の発言に軀は思わず吹き出した。何より飛影から『寵愛』などという言葉が出てきたこと自体可笑しくて堪らない。

雪菜を寵愛つというアレか？アレなのか？

一瞬の間に色々想像してしまった軀はそのまま盛大に笑いだした。

「……誰がそんな事言っただよ、ククク」

「奇淋……」

それを聞いてさらに軀は爆笑した。

「アイツはそういうところ……、昔からちよつとズレてるんだよね……。ククク…、ハハハッ」

こうなるのが分かっていたから言いたくなかったのだ。

飛影はフンッとそっぽを向きながら軀が笑い終わるのを待つ。ようやく笑いがおさまり落ち着いた軀はしたり顔で飛影に近寄り話しかける。

「……それで、お前も真に受けて妬いたのか？こんな目立つところに跡をつけて……」

くいつと自分のショールをずらし首筋を飛影に見せる。

赤い小さな跡。

そこには昨晩の情事の名残りがしっかりと残っていた。

「こんな事しておいて焼きもち焼くとか、お前可愛いな」

つーっと人差し指で飛影の胸板をなぞるとニヤリと笑って軀は小さくキスをした。

気まずい表情の飛影とどこか嬉しそうな軀の目が合う。

飛影の手が軀の腰を抱き寄せて、軀はしっかりと飛影の肩に腕を回して。

二人はゆっくりと顔を寄せて唇を重ねた。

「元三疎みのオレが人間界に住む雪菜と懇意であるという事を広めたかったんだ。そうすれば……、氷泪石目的で雪菜を襲うヤツも減るだろ？ 法整備するには……もう少し時間がかかるし……」

そう軀が話す間も飛影の口付けは止まらない。唇に。頬に。耳に――  
「……、飛影……、お前いい加減にしろって……ん……」  
再び唇を塞がれて、舌を絡ませて。

――不器用で言葉で伝えられなくて。

――それでも伝えたい想いがあるから。

ようやく解放された軀は頬を染めて、少し潤んだ瞳で飛影を睨んでいた。そんな軀を見て飛影は満足そうに口許に笑みを浮かべ、そして再び軀に顔を寄せて耳元で囁く。

――消える前に帰ってこいよ

ああ、本当に可愛いヤツ。

お前以外にいないよ。こんな気持ちになるのは。

軀はぎゅっと強く飛影を抱きしめた。

続きは本編でお楽しみください